



俛語一系集

三



伊地知文庫
文庫20
355
3



文庫20
355
3



伊地知氏書冊

俳詠一葉集附合之部二

貞享元甲子

狂句本枝の身六竹言か子似くう
たそわとげり定けらるる花
るのの主水子酒屋他とさ
うらけあをふくみ赤
釣解のふさうすまの白ひあふ
白のうて(平沙千米を

翁

野水
若子
重五
杜國
正平

古學子庵併号
幻窓 湖中
坎窩 久臧 校



ウ
糸虎ハ海子ノ柳子ノ妙子ノ
髪ヲヤシクシテ其ノ水ヲ以テ
洗フニ
消ぬ卒都婆ノすこしと
カケテハ曉きふく火を焚く
河ノハ
田中ノ舟ハ小舟ノ柳子ノ
昔子ノ舟ハ小舟ノ柳子ノ
味さうしき河ノ水ヲ
二ノ危子ノ追憶ノ花ノ
蝶ハ

水 五 玉 号 五 翁

二
今了るのみ矢をくす
ゆす人ハ記念ノ柱ニ
志ハ
望ぬ
あ
鳥
秋
日
中

号 五 翁 水 五 玉 号 五 翁

一の法吊ふそよの夕々終子
箕千飲此魚をいしき
季行のり星くしく
くうそつとまゆさ
疎ひく居局の春賀の花満
廊のハ蔵はうけはし

玉 水 号 玉 篇

幼も杜幸のそよふつ
幼をたしきつる節の食
かろまきと尺る節の食
かろまきと尺る節の食
くつとあけたとをいふ

野 水
杜 國
玉 水
号 玉 篇

庶その月袖の朝霞をひき
櫛也をまお真徳の宿
あつゆの海魚の田畑
たくのまきと尺る節の食
床文を解たハつとあつ
縁さかつけのうみ
口をいふ 痛をらきる力あふ
ゆめんかたをうり首おろせん
小三右ふさつとまゆさ
白をまきと尺る節の食
縄あみのかつとあつとあつ
くつとあつとあつとあつ

重 玉
正 年
玉 水
号 玉 篇
玉 水
号 玉 篇
玉 水
号 玉 篇

初也の事や嫁仕の先く
先心くらお喜そかどゆき
二 椀茶餅すゆの室はのあ
くゆき起上政留も
漁漁く楯を柳の葦き
之隙可くん不破の再人
そすく美濃さあく其を忘
解と先くはさす七十
なかめさう法事さあさ
ひの傘のいこさくさ
葉は子後の子あふま
さくまつうの存私を海

水 玉 号 五 玉 翁 五 水 翁 号 水 小

力子たし、唐猫の髪あめ
忘きぬ理臨海を ちん
秋探れあきく都さハ
着の寧つふあを山ら
被より祝をひき山可け
ひくハ興竹の鳥の肉竹
三々の也翁翁尾長け
くくみくむ越の留活

号 翁 水 玉 翁 五 水 翁 号

杖をひくさく山さ
はみくさく月さく
水あゆくあはゆ

杜園 重五

鳥居の葉を初狩人のまゝぬひく
水の伊門と井一阿けの喜
了書持たしやう他のおうすみ
葉のほ若き一むゆきおたんや
ら〜けの物うい娘〜つや
燈籠ふ〜ゆ子情〜子衣
おみぬの角力ら〜を〜を
葛ま〜喜一浪賀未の坊
約月取又ふおおぬ〜
お心買〜お〜き〜
鬼ふ下の業〜お〜
鳥居の果より米あん〜

野水 扇
高号 正平
玉 五
水 号 玉 水 扇
玉 水 号 玉 水 扇

おぬま〜は浪のありぬれり
佛 言〜魚は〜
鞍ふ〜お見二所と傳われ
玉取さ〜おの〜けお及
〜お〜け〜お〜
古屋の〜お〜
お縁や〜お〜
お屋の松を〜お〜
お〜お〜
三十〜お〜
お〜お〜
お〜お〜

扇 玉 水 号 玉 水 扇
玉 水 号 玉 水 扇
玉 水 号 玉 水 扇

あゝ人を行くも枯す秋はさん
けしきのひさしをこもす解
三つ月の赤きくく降の赤
秋の幽子舞之く者
意下をもゆきしは道も敷き
ありよふ念併 蕪も踊り
朝くしよふ新舞けし起休
わらふくもくも秋の帯引
こわれ舞玉の赤の影入
母をわらふも赤も舞く

難波波子河一火くくたえ

五 水 玉 水 子 水 子 玉 水 子 玉

すけしき

あゝ人の行くも枯す秋はさん
けしきのひさしをこもす解
三つ月の赤きくく降の赤
秋の幽子舞之く者
意下をもゆきしは道も敷き
ありよふ念併 蕪も踊り
朝くしよふ新舞けし起休
わらふくもくも秋の帯引
こわれ舞玉の赤の影入
母をわらふも赤も舞く

重三

五 水 玉 水 子 水 子 玉 水 子 玉

火を忍ぬ火焼く人をも忍ぶ
門をしのびし強名可なりと世の
血刀可くしつゝおのれを
老方下る本御の程七つみ
みまの物重なりくまへ
花より梅の戀と捨つる
信ものいふす歎きをものむ
白蓋湯ぬぬみす胸を洗ひ
宜青よりこく釵を渡す
八十年を三つ尺の童母持る
みくらしそむく七つ小妻
石もく桂の花のつらむ時

五号水玉翁
五号水玉翁
五号水玉翁
五号水玉翁

夢は油のト木くつれや
妹の家を笑ふ。女兒の胸の
弱瓶に薬を渡すの言
体り末に指をかき正月に
つらみより并夢の宝
子の白お息を張治の志起す
やかくけしき田原の地
つらみより強もいぬ人の像
泥子くらの信き芥子の松
粥すつゝ曉をくすくす
粉名のいす強よき風
水の分ふく（笑）

五号水玉翁
五号水玉翁
五号水玉翁
五号水玉翁

所へはむらさきをせむる村向 水

田舎脱走

三行

家内や静のつくく無ひに
 夕のゆきあふれあふれ
 櫻槍山家の傳は本葉陣
 ひよす。牛の培うゆれつ
 音もあふ具足はたのしみ
 酌とる音葉きりにいて
 秋の頃旅の湯まよひに
 中やこころはく不二尺ゆき寺
 寂とく枝の末のあふるき

翁
 重五
 杜園
 羽豆
 野水
 翁
 号
 玉

家内や静のつくく無ひに
 夕のゆきあふれあふれ
 櫻槍山家の傳は本葉陣
 ひよす。牛の培うゆれつ
 音もあふ具足はたのしみ
 酌とる音葉きりにいて
 秋の頃旅の湯まよひに
 中やこころはく不二尺ゆき寺
 寂とく枝の末のあふるき

水
 三
 水
 三
 翁
 号
 玉

伊香子 進むまのひくす
 鉄子 思ふの小角豆のむらりし
 萱 庭まゝに炭火つくの白
 芥子 尾の小切まゝにまぢり
 打る 草子の穿まゝに草のみ
 新 草子 飯基のまゝに月の高
 高 草子 狐のやまゝにき
 物 草子 狐のやまゝにき
 豆 草子 母の表子入
 元 草子 此後を竹の
 依 草子 木幡の障子のまゝに
 い 草子 海小男 猫のまゝに

玉 子 篇 水 笠 玉 篇 号 笠 水 玉

喜の志すすれを掃をよふ
 あり干をまゝの聖わや
 山 草子 白くまのまゝに

玉 水 笠

同

い 草子 尺とにほまゝにまゝに
 朽 草子 火子 河子 枯 系 山 松
 木 草子 鐵子 下子 草子 草子 草子
 捨 草子 草子 草子 草子 草子
 浪 草子 草子 草子 草子 草子
 ひ 草子 草子 草子 草子 草子

野 水 篇 杜 重 篇 号 野 水

羽笠

同年臘月十九日

海苔の鴨の煮 海苔の白

串に鱈を焼く 鱈

二百年系山崎取

狸の種まく 秋を末

入内子 鷲はき

かきまぶ玉を家おとれゆ

海苔を煮く 母の煮

一輪 咲く 芍薬の

棋の工丈二のしら

肉子 物く 狐ふく

雲をほく 海苔を煮

菊

桐葉

東藤

工山

紫

山

菊

菊

紫

菊

華表をけく 松の入口

笠をゆく 衣の破れつ

秋の鳥の人 鳴くゆ

をくく しの世系

を方れ 雲子 龍を古

おくもく 石の扇を

美人のかくち

二 城夷の聲を

生海苔を煮く

木下を煮く

煮く 膚を煮く

をくく 地礫化

山

紫

山

菊

紫

山

菊

山

菊

山

菊

糸子あきすし一病のすしあひ
 不二の根と望きてるすのうあう
 病のゆく弊のひと山あしむ
 中つるす張を思ひいす糖ひ
 衣うらく小姓あすの戸を押
 月行く妙計のひききハッ写
 根いそくまてうの
 破れたる具足をもふり捨けける
 手舞の舞子そりけゆる
 紅練のなげ紙も花のあを紋
 らひそふまの永むらの伽
 幸ぬの新若女標荷ひまへ

紫山 紫山 紫山 紫山 紫山 紫山

まつ子らしすの根の標あ

菰

花のあきすしあひあひ秋の
 花のあきすしあひあひ秋の

雷校

菰

花のあきすしあひあひ秋の
 秋のあきすしあひあひ秋の

藤延

菰

河の狼あし捨るむ本紫あひ

塔山

すききり 雲の 雲 四十 一 翁

古くは 旅の 故郷を 見せし
古人の やし 此 旅の本 ありし
翁 如行

舟 夏 渡 ぬ ち ち へん ち ち ち ち
輪 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
舟 一 つ ち ち ち ち ち ち ち ち
翁 桐葉

志の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
翁

志の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
翁 桐葉

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
翁 閑水 東藤 桐葉

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
木 枯 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
翁 桐葉 東藤

まゝ〜〜子垣おのり路にや
御〜も新を〜〜内のお
ま〜〜ハお〜〜志先了服

叩端
如行
工山

歌作と子積〜か〜はよ〜兼のま
そのめ〜つれ〜〜風と詠〜

木因

翁

貞享二乙丑年

三月廿七日

何と〜〜〜見〜〜や〜地〜〜堂軒

翁

海を〜〜〜性〜〜
田畑〜〜〜の〜〜の〜〜
〜〜〜た〜〜〜中を
有〜〜〜の〜〜の〜〜
酒のお〜〜の〜〜さ
〜〜の〜〜〜さつ〜
〜〜瓜〜〜〜神の〜
〜〜お〜〜〜娘〜
〜〜の〜〜〜〜王〜
〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜

叩端
桐葉
翁
編
葉
翁
葉
翁
葉
翁

燈火風をまのし紅お
川激ゆき撃と角に流るけ
今利とく、流るおのく
か、くま、石の流すの花久
二羽打千海をく、横や
赤よみく女、春和く、
枕、屏風の終、流るみ
おの、お、浦のいろをささ
之、殺の舟、深川の、
危、危、や、杜、杜、を、
花、う、う、竹、の、ま、
ひ、う、う、吹、を、わ、

端 紫 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端

水汲小伝袖のや、
月、夕、夕、板、を、
お、お、お、お、
村、お、お、お、
ひ、お、お、お、
お、お、お、お、
男、お、お、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、

端 紫 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端 扇 紫 端

同日

つくと枝のせし袖より
ひくく葉をつつむ葉の一家
夕影山神の離れをせし末
清くもをすくふる柄杓の
わらうらき燈籠の飾るの
高の土倉の探るをほる
鼻残のちのちのさすけ
さう大僧の三升の隠さく
さうと徳島の焼く袖と尺
霜のゆく時北四五百の
松風のひくきく酒を飲

桐葉

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

佛 ときさむ西宮の
鳥羽玉の髪きく女官の
色をも尺破る朝の日の
秋ハ新只青く物くひく
白子のたまはる方海の
浪よゆうの飾の骨の
泣くゆく朝のからくさ
室持くさるるたけのやも男
玉守の塔のほくく
翁の尾をの囀り掛きて
風千めを置るの付死
華くくく杯の度

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

田舎よりくち物見そまらる
 打ちあつてあふれのうらみありけり
 多うたつて君と酒をひき
 白きみの跡う船おとせり
 おほ人帰来おみをと占ふ
 龍艸の末れ寺の月邊く
 猪子の粟此何とせりけり
 控へてきまは松林の秋の虫
 草家よりうきうき尾の跡
 表よりく物焼く物の中
 入りの江の早二二
 室中、油きけつと花のれく

菴 柴 菴 山 菴 菴 山 柴 菴 口 菴

つーしはふとんえら西行

楫

同

牡丹葉を深くさひや、控のあけ
 初月 浮し、春の玉 降
 委代、さみまふ、おまけけり
 けり、船をけり、葉とる
 新家根を、まぬ板の面、空
 二、百ら、ひき、百、れ、葉、乳
 だ、さ、引、法、ハ、少、あ、り、の、男、同、士
 流、り、写、り、地、の、人、う、け
 竹、障、の、す、り、と、ふ、力、の、又、景

菴 桐葉 叩端 菴 菴 菴 菴 菴 菴 菴

舟の寄るくたぬく舟の魚
手子くく舟あゆみの舟り京
からんのくく舟り舟り
くすくくき屋くく舟の層
硯のくくく舟り舟り舟り
くくくく舟り舟り舟り
省志風をくく舟り舟り舟り
花あきく舟り舟り舟り舟り
墓の泥をくく舟り舟り舟り
出代の舟り舟り舟り舟り舟り
舟り舟り舟り舟り舟り舟り
地雷火舟り舟り舟り舟り舟り

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

舟の寄るくたぬく舟の魚
手子くく舟あゆみの舟り京
からんのくく舟り舟り
くすくくき屋くく舟の層
硯のくくく舟り舟り舟り
くくくく舟り舟り舟り
省志風をくく舟り舟り舟り
花あきく舟り舟り舟り舟り
墓の泥をくく舟り舟り舟り
出代の舟り舟り舟り舟り舟り
舟り舟り舟り舟り舟り舟り
地雷火舟り舟り舟り舟り舟り

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

湯さやの杖は産ふ本言
花畑千重うのまき紫引枝の
うれも角廻まきね堀牛
菊

同

柳の心まき木さや四月の極新
まきの杖つく岨のまき
牛の子れ乳まきのむと紫引枝の
かけろふとまきの竹の堀棚
袋つても紫の穂まきの細まき
ひまきまきのけまきのまきの
まきのまきのまきのまきの
菊

菊

狂歌の傍千かきを只
鼻跡千流まきのむ女河う
ふさけの市上への絶う流
まきのつ歌まきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきの
水

菊

同年六月二日赤武於小石川無行
涼さの瀬まきのまきのまきの
まきのまきのまきのまきの
松風のまきのまきのまきの
酒店の秋まきの厚子のまきの
社まきのまきのまきのまきの
菊

清風

菊

嵐雪

其角

才丸

昔懐作くあや志く
この北と今いそまき一真元
鐘と花あれいやういの盤
光くう手竹流い老をたうくう
おきうーとうらわうー
戸隠のいふ小家の静く
何雲梨もくあや父の三年
多新うくうかれ自境の一意屋
舟く一庭くいのらあきあふ
雨そあ川改き火いく蛇く
草花のあれもあを十
既くく人基すれ人をいさむ

二腐 素堂 風 霜 空 角 丸 為 堂 風 霜 空

吟石守く白眼くもやうに
吹縮菊千さらのくお月よらよ
淨瑠璃みんたあうく心秋
枝の宿此便あう小中歌子
くーくろ尺もさう美婦如き
花あす玉々の風ハ後ういり
水系をき丸いひの 素
三尺の鯉子小能く料理の云
くや魚あもをみくむけく
幾回の戦い片や受中うん
逝水やくを控ぬものあハ
白きのとくう帰えの十五白

角 丸 富 堂 風 霜 空 角 丸 富 堂 風 霜 空

支碎 碑の更平 遠一
臨のすまふらうのさるまを
を一息おのほを二羽一
棧造りぬ橋の石を指をん
きぬくの衣を存およそ
のあれはつく一の人のさ
古梵のせうに花四を
ひろくしは夢 臨のすまふらう
引板を業くすまのこ
武古のものすまき 職
七里は海ぬ七里 秋風
忽之の雷 南はちと化

九高角空扇風壺高九角空扇

槐のふるふるさく解くす
臨陽外の宿をすまの飯を建
狂女さるらふは志とふら
情一さるらふは志とふら
将く味ふ出羽の 餅
空角のさるらふは志とふら
枯るあつ一のつらさ秋
智多れ夢を起しをさるら
三里たすまふらう不二
扇をちかふらふは志とふら
まを然る小の 晦
臨片とすまふらう 椽はく狭うき

扇風壺高九角空扇風壺高九角空扇

砥水きよむる五郎入是
梓もよハ上戸も穢るかくこ
きちらむし風うほり藪
伊豫すくれ湯柳の敷ひき
入院尺あるの長う砂と法
一陽を誓正月をわく木
海極よらうりあきや
深後のあしし知りもあむ
志のふれみれ瘰癧も
くむ幸こらう龍竹をさ
名もあし取もさ
后の月あき入尉あき史

雪角丸堂風扇雪角丸堂

三
みゆはれ狂つて
志を死に
和をれ石凸四
小女郎小まんら太根変丁
血をそく起情も
尺よもの母か門ハ
涉所の
汗涼
ふりこ
救花も

風扇雪角丸堂風扇雪角丸堂

角一服も花ハ一す
特のくろきもさすの夕言
定家まつた杖おたすれ
佐く咲也も八まも尺もさす
梅の輪入の位心わ
ひるさも強干さるるらた
能を修ぬ不物号き
参りあてさひさるるらた
わらうとて提す四方勢し
宛傳ハ家も匠ハ人や心
さるるるの真砂水園

角 雲 翁 風 雲 翁 丸 雲 翁 風 雲 翁

角一服も花ハ一す
特のくろきもさすの夕言
定家まつた杖おたすれ
佐く咲也も八まも尺もさす
梅の輪入の位心わ
ひるさも強干さるるらた
能を修ぬ不物号き
参りあてさひさるるらた
わらうとて提す四方勢し
宛傳ハ家も匠ハ人や心
さるるるの真砂水園

角 雲 翁 風 雲 翁 丸 雲 翁 風 雲 翁

梅さくら〜きのつや 露をぬすまれし
秋葉をすらすらすニつるひつり
翁
秋風

露さくら〜草息さく 枇杷の皮は
笑う〜こ〜山をのむ
日の霞 秋風の音をきく
翁
湖春

檀の木は ちか〜か〜ぬ 露をうめ
家すらす 去をほこふ 乙
翁
秋風

梅 絶く〜水〜 梅 今 何々
草の 露は 蚕 葉を〜つ〜
葉の中〜の 葉の 虫の 葉は
翁

か〜さ〜の 梅を ちか〜 露を
山は さくら〜を 綾〜 露
翁
子歌

さくら 翁の 御の け
さくらよ 草は すす〜 乙
翁
翁

とらふ舟の棹さしてかゝる狂者の体現
重く桐のま本御中へ赤特と付る附船
大切し

酒の 幌子入蓮の 月 口齋

四白目ふれが精しそその指体酒酔が
まのよく折し付る幌ハ佐藤をくどん
おしむまのきききりし

秋の山ふふ木れろのゆる文ん 芳重

秋の山ふふ木れろのゆる文ん
秋の山ふふ木れろのゆる文ん
秋の山ふふ木れろのゆる文ん
秋の山ふふ木れろのゆる文ん

秋の山ふふ木れろのゆる文ん
秋の山ふふ木れろのゆる文ん
秋の山ふふ木れろのゆる文ん

秋風

お白山家の体は尺所して付付る穉はハ
まをかく山嶽ハ炭電を振るまをま
体おまあふまのくも炭電のまの白仙
強き人のまぬ取を尺付る新きまの
里くのみま 後ののまのむく 徳

仙化

附船ふまの 炭電のまを船夫のま
お白山家の体は尺所して付付る穉はハ
まをかく山嶽ハ炭電を振るまをま
体おまあふまのくも炭電のまの白仙
強き人のまぬ取を尺付る新きまの
里くのみま 後ののまのむく 徳

李下

見お素衣の袖を付くももろく何と
後めくも思し思しのまていひら
よし松飾も花ひかしむみくたし
うらひきよく高を催し侍る常き
并口字後子元新

奉白

おまきさきこ島をとおむそあれハ
これさしつらふななくく侍者の心は深
く思ひつらふもくも松飾も常き
あつせきつらふもくも心は切は侍る
念佛子 松の侍りつらふ
けりつらふも松飾もくも心は切は侍る
社之佛者をくもくも心は切は侍る

朱信

あまの松信くもくも心は切は侍る
そまきさきこ島をとおむそあれハ

蚊足

海まきくもくも松の無くも心は切は侍る
まきさきこ島をとおむそあれハ
松飾も花ひかしむみくたし
うらひきよく高を催し侍る常き

五里

かろかぶらも松の無くも心は切は侍る
まきさきこ島をとおむそあれハ
松飾も花ひかしむみくたし
うらひきよく高を催し侍る常き

三羽

まのの松飾も花ひかしむみくたし
うらひきよく高を催し侍る常き
并口字後子元新

こゝろは〜山付やう様〜しよ〜
の姿その眼をけし尺〜し
うき世にたふもを富の尺ゆめ
あふを標中〜し〜付〜句〜
〜を〜し〜却〜世と〜
〜を〜能〜親と
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
富の尺酒も〜し〜た〜世の
よ〜志の句を能〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜

執筆

文鏡

後任女 きぬ〜し〜

貞節

後任女は〜し〜の妻と〜し〜
ま〜し〜し〜し〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜
あ〜あ〜し〜たの〜本〜度子
よ〜志の句を能〜し〜

二齋

山のうらと甲斐又の代とも尺よの
松のあふ出きまら山川のさけく吟
一き御を形宮一しし松むら松と
ゆーいーいー

松風

法の去系別髪をも埋みまらん
袋の危く物すまきまを尺しあのみ
孝を歌一しし甲斐又の古人佛光
の古法未おほく自然の事とせよ
あふしし刺髪を埋し至他言新く
まを尺と尺尺

茅草

まのりーれ記をもすの竹の戸
あふしし松風松風松風

伝きり

吹のりー車かきゆのちのりけ
あふ松名の御をとしらうこむ
編を締一しかたれ何人のひの光
花入身を日にかき入る御と只白海
白他の新しき松一まを眼を過一

李のい

橋ハ小あをもとゆの 松冷
まの事字し木のつらいやと橋くあ
うししあをも尺し松風の緞目
あしハ安しとらうくけらものこ

他化

二
松のちを松の葉いよの松とく
是又まのけ一ましけ松をいよほし
朱弦

此を田畑とせよ秋いをも傳れしを

子北幸しうはあなれありきりきんか

あし秋あなれにしきしきしきしき

をのうやうとては其情ありし

志山うしり 酔う 情をもとく 岸白

夕けのうきをも無しとてきしきしき

あしうきを無しとてきしきしき

長ちの 秋あなれし 子里

は白附あなれきりおる白しお白北

情をも現在うしきしきしきしき

きりきりしきしきしきしきしき

情をも下のものしきしきしき

情をも情もきりきりしきしき

夜師 真まきりきりしきしき

きりきりしきしきしきしき

元いし 情もかきしきしき

朝明とさしききしきしきしき

情をも情もきりきりしきしき

情をも情もきりきりしきしき

情をも情もきりきりしきしき

けいし 情もきりきりしきしき

情をも情もきりきりしきしき

情をも情もきりきりしきしき

情をも情もきりきりしきしき

松風

篇

かれにまき取りていふをなす侍の足
おのちまじ粒おまむのゆーひふりて
かぶりて

紫分の 風よまの良き入 豆腐

まの良切とて紫分新しおの民家
一と武士の良若とも子と改しき物
なと足付て侍し大粒の物清なるの侍
を及のしつりて成に中侍も人の聲
たさ小粒入良舟も足付たるたの
たぬ一とあつたれとも子あつても
子にあつた良侍のこも侍るとて
と一とあつた

か 侍とていふものいふも 狐尾 甘角

敷うけのまき取りていふ侍の
もつれん侍をぬお侍り思ふまに
いふ侍りていふ侍りていふ

侍りていふ侍りていふ侍りていふ 又

そのおの良侍りていふ侍りていふ
おの良侍りていふ侍りていふ
足ゆつていふ侍りていふ侍りていふ
子侍りていふ侍りていふ

石の戸相袖すの侍りていふ侍りていふ 岩白

まの良切とて紫分新しおの民家
一と武士の良若とも子と改しき物
なと足付て侍し大粒の物清なるの侍
を及のしつりて成に中侍も人の聲
たさ小粒入良舟も足付たるたの
たぬ一とあつたれとも子あつても
子にあつた良侍のこも侍るとて
と一とあつた

身はよきとくし者いふ所の出や一礎子
次子の満十市の里芳村の里玉川なる
附く伊奈子伝く付る所は此の附の
源系をよ不二月に更科し付付るを高
射の形をよとくしとよきとよきと
むいゆゆとくし

これ三代の力一丁 張治 李二

はり張中の素物し新なるむ人し
付くし付る者ふとや物と伝くし
石の戸櫃なりし一 張治を伝くし
よきとくし伝くし伝くし伝くし
ひた剣をよとくしとくしとくし

かふは三代とくしとくしとくし
名人ととんる也

永福ハとくしとくしとくし 松の風 仙化

永福ハとくしとくしとくしとくし
かふはとくしとくしとくしとくし
いととくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし

近江の田植とくしとくしとくし 朱位

古代の伝し金とくしとくしとくし
昔ハ物とくしとくしとくしとくし
人しとくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし

疾起こゆのちらふきんほしきん 芳重

時をよそと念をよそと白くみ波をけし

一やとらうし時をよそとゆきよのちらふきん

舟り 舟のゆけ海ゆき舟こ 共角

舟り水急津海なるにまづ白海に舟

こころのゆきとこころの風をよそとよ

うけぬ舟り舟のゆきをよそと舟のゆ

きよきれにゆき舟の物をもよそと舟の

舟 荒波をよそと人の娘をとつれこ 孝正

舟の趣向白帆けおめし具足き舟

中に風波人の娘をとつれこ舟のゆき

さきさき舟の趣向舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟 松尾

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

待の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟 舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

之や一と某諸郎も亦なり物休
一其休を心すうけく得ぬ地を有るむ
くの中へ留れ就改る所のべし
るる地をうす又言葉の事をも
とに解るるは味ひあはし

友よふ 蟻 け 物一きの ち

化

友亦蟻を改改りしつ物休の休
物休さるるさるあひの言はし
よくうけうりきあつとさうし
ふふをををわしつ

あさくそりや 一とくく 歌 景

コ

蟻のけとさう 田舎の休とさう

市へ付るるの路へははるる
路へははるる私之の路へははるる
よみ付る路へははるる
の路へははるる志ひし名ひす
うりつるるあひははるる

門ハ 息 千 夜 際 の 寺

岸白

鄙の休あつたははるる門へははるる
細くあつたははるる休多し
と附るるすつたははるる
御石あつたははるる物とあつた
大のあつたははるる軍とあつた
屋寺中へ押よく狼藉しつ

芽重

さるまゝとに似るくく一毒の中はねとわ
うへ安永の心をえ有るくく一と心合をう
うをえんくく

河くゆの敷れはゆをえくく一 其角

おりの機をよくきくくく一ゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん

船の一をくくく一とたをゆい見て
たんし階はまひくく一とたをゆい見て
とたをゆい見てとたをゆい見て
とたをゆい見てとたをゆい見て
とたをゆい見てとたをゆい見て

又鶴

よえくくく一ゆのゆのたう入りの糸をゆ
くくくくく一ゆのゆのたう入りの糸をゆ
はきくくく一ゆのゆのたう入りの糸をゆ
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん

紅の館に秋をゆいあゝ 李山

ゆのゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん

稲もあは木百をゆいゆをえんゆをえん 琴白

ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん
ゆをえんゆをえんゆをえんゆをえん

世もいづし海も秋の萩も子し
はまもあふ聖神ゆきも夜も鳥
杵風

此の竹根一と又もあてて物遣ふ園の
萩の編あひのしとす時を聖神
ゆきも萩を此神しく他世のすまこ是
おもしくす侍ん

人阿まうこ事と物とさうつおり
揚水

此の又秀逸し聖のあうくくくく萩を
大悔りの萩とさうしけし先路を聖ハ
世とけこひくくく聖神人ハ事ハ物も
かみきとこみ神とけ骨折しあうの心
も多し萩に萩味す

酒もいづし心も山も洞も
朱弦

金山ハ糸糸の大空しあうをさくくけ
くく萩とあうし萩のゆき

右も美阿のけし高射の他世の志保心は
くく萩とあうる萩 萩んやとけりけ

右も美阿のけし高射の他世の志保心は
くく萩とあうる萩 萩んやとけりけ

三
けふけ武松もあうけけけけ
共角

玉川や萩のくく六つけあう尺く
三角

卯のふけこれ精もあうあうけ
心化
芳重

竹うらるさハ在かこよ侍
 南むく葛屋の柳のちあきし
 親と樓を折屋のつれし
 餅化しあらの度あまを折合を
 換り買しし社のおらるる
 唐のうもものいぬ人もあつし
 めくき男のしひおすむ月
 蓮の雨枝七里をぬすし
 仔細河内のおる川つ
 あり車米つてくるし
 梅ハさうりは院くを閉
 二月の蓮葉人もすさあ
 楊水
 不卜
 文體
 松風
 菊
 朱法
 不卜
 李下
 楊水
 甘菊
 多喜
 二宮

姉まのまはをふりの氣
 胸のうぬ裁の端を織るの
 おもひのうとくく昔の菊さ
 菱の葉をさうのみをてたの
 木魚のゆつ山うけり
 因をやうし休むる朝月
 秋さしあうさうつれし
 一射をくあうを付る
 くらあうらんあは増りか
 三度徳芳社のさうりし
 ありしハ喜可あうつ
 契情をさうれぬきあう
 若童
 菊
 松風
 文體
 李下
 楊水
 不卜
 二宮

名

煙よりみ習ふ夢のうつくし
 川流ふ多折り子驚うく
 梅生さし昔ふやめわひあうく
 村角より石のともし火吹けぬ
 地とさる花の沖とさる川うく
 伊勢のそのる内子釣りの所くさき
 梅よりきく橋つくく秋
 伊長のゆきされつ世やみゆく
 尾すくゆくし花ふの火
 紅く牡丹十里花道をかこ
 ちくちく音くあう湯と
 岩根流れもふ地を流るすく

三十一

久くや三井のころは法法とも
 通ぬ道よりあふ奴子返家
 管弦をさるす月ハ流り
 足成の庭山よりさる梅
 子春の唱る観音の湯
 舟ゆくつ津みまのつ川傍心
 をふくくしサる松の志く流る
 宿むくらの七折り花もあふく
 春の所くくくさる久く

三十二

古事
 古事
 久のうやうや花くく初春を春

旅あゝ友をささぐりこす春
かたハアウ極の葦掃屋
よしこひきる一瓢の酒
月ふれく燈火赤ふ海の上
味ハ廣く吹雪きのおと
牛境子給持そく羽折る海
右位阿くく美女百々さ
提灯子大燭燭の言々さ
おあさふす字の材木
あささうハ舞ふそり奇の宿戸
はくおし戸戸の後音妙え
仇人のあさふし氏を於

扇 其角 鼠雪 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末

けり付く葦掃屋の
峰へ送る八重山もこの火の
軍の加減うとき長おひ
七はもに心うさるぬ月も
平生くうけく極東の帳合
高僧の語を傳うはうく
小好は海く葦紀の中
丁寧もささぐりくお杖袋
あまのささぐりく次戸の塩藜
表まもささぐりかさの対き
はらささやさし竹の夕け
冥かさる食すめお能え

末 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末 末

毛體を——きと画のそ——り
 くらゆの底のふり十景 家
 りそゆ時そ 醉さきの月
 きりくはひのしほりのあけまよ
 堂にくま——き菊の種改也
 づ川とともふ部の後戸の片燈子
 四の菊菊子そそく家の子
 鼻つよむ屋よりそきの者
 けとらけりまけぬるそけりまけり
 縄きれく架本そけり花もらけり
 花のそ菊のそけり長家き

重角菊 末角 重末菊 空角 菊

三月廿日

花吹雪七口都尺の菊もこりぬ
 慣る植はれわ——細梅
 足徳木そまきそお代——そ
 米一升そまきそ一昇の戸
 名有冬 疎ハの菊こき 松
 枝尺こき——き 桐の葉を菊
 善名そそくハ虫はかきそ
 内かたハ向き川の菊もらけり
 既子立付の使の菊もらけり
 一表の菊もらけりけり
 松の菊もらけりけり

菊 清風 菊白 曾良 口腐 甚角 風 白 長 菊 角

生々、控ふれあひしあつり
 影かゝらし〜女敵をきりあけ
 下〜の餅をわきよ山 寺
 雪を竹摺やささ〜にちあはし〜
 虹の付〜めハリ〜白のあ紀
 沈み〜、澄泉をささ〜力あさ〜
 三ゆ〜麻糸は〜川夫を 戻
 いき〜と年〜雪あ〜約をき
 男あ〜の〜此白粉を ぬれ
 膝あ〜の明の風鈴を忘れさる
 赤〜の〜牡丹黄 つ〜
 耳〜の〜妹、告〜の 鄭

風 良 富 白 角 霜 富 鹿 風 角 白 霜

け〜も〜みゆ〜草履を〜てた
 北焼〜てカ〜う〜ハ 焼く
 系〜の〜聲を〜扇はか 掌
 揃ぬ葉狂舞やき〜〜まゆ〜
 多の力あ〜ハ〜を〜
 物〜の〜物やお人のい〜
 眉ぬ〜袖の翠髪〜
 唇のま〜ま〜ぬも〜を〜
 意〜の〜山
 衣〜の〜蓬〜
 何〜の〜
 赤〜の〜

風 良 富 白 霜 富 鹿 風 角 白 霜

車と下と喜の体と心 白

和漢

破風^{ハヤシ}の^ハ影^{カゲ}も^シ弱^ヤく^シ又^マす^クみ

慈^ニ系^キ蠅^エ避^ヒ烟^{エン}

合^カ歡^{カン}醒^{セイ}馬^バ上^{ジョウ}

か^カの^ノあ^アの^ノ少^シ洞^{ドウ}の^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^ア

月^{ツキ}代^{ダイ}見^ミ金^{キン}氣^キ

露^{ツキ}繁^{ヒコ}添^ソ玉^{タマ}迹^ヱ

弦^ヒ地^チの^ノ物^{モノ}と^トち^チの^ノ物^{モノ}と^トち^チの^ノ物^{モノ}

碧^{ヒキ}第^{ダイ} 疆^{キヤウ}偷^{トウ}氣^キ

古^コく^クの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^ア 扇

乳^ニの^ノ心^{シン}係^ケ何^{ナニ}と^ト見^ミる

舟^{フネ} 鐘^{カネ} 鐘^{カネ} 絶^{ツト} 日^ヒ 高^{タカ} 川^{カハ}

魚^{イサ}の^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^ア 扇

食^シの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^ア 扇

託^{タク} 教^{キョウ} 三^{サン} 社^{シャ} 本^{ホン}

韻^{イン} 使^シ 五^ゴ 車^{シャ} 填^{テン}

花^{ハナ} 月^{ツキ} 文^{モン} 山^{サン} 閑^{カン}

海^{ウミ}の^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^アの^ノあ^ア 扇

剪^カ 銀^{ギン} 針^{チリ} 一^{イチ} 寸^{スン}

扇

扇

扇

扇

扇

扇

扇

扇

扇

善師の海や玉を以て
 勢より舟の跡をうら
 風 飡 喉 早 乾
 肉を焼くともう
 霧 離 顔 孰 兵
 寰 浦 月 潜 音
 ぬらんまを
 山 伏 山 平 地
 門 番 門 小 天
 鷗 鶴 窺 水 鉢
 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺

ちのりくく
 したる海に初瀬の
 臨 谷 伴 蛙 仙
 壺 篇

横 吟 の 聲 を うら
 ゆ 香 うらうら 芦の
 響のわが跡を 陽の
 留りてささるる 系
 入月より 芳 歌 の
 葉の笑ふ 竹 葉 の
 山 寺 の 燈 籠 狐 の
 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇 壺 篇

花とよのちやと酒造りし
みづのまじりにかきぬる酒のさ
えりまの煙の垣をてぬこす
縮張を標の柱を筋の心
みよれし髪を直ぐかんき
細くあふ形尺のつらみさく
何と焚火のさぬ火
構の月ひららのさる倍やも
濃はふさぬし表の義うけ
木志のやの礎や等あらん
四十夜了る風もあらず

霜 菊 沾 菊 沾 菊 沾 霜
霜 菊 沾 菊 沾 霜

手とやあやのねは星月秋
草 紅梅をたむむ玉 残
妻もを原そのまおゆさ
山より尺さる夕なけの所
ひく只をとおそく写子川
故き子あす秋をさく
有のすすくさへ鯨の刻みまの
帆を八合子掉郎の命

其角
今我
若翁
松風
船棠
横儿
若翁
仙化

古池や煙草こむあのみ

若翁

其角のつゝの結ぶくうる松の葉 其角

渚きぬ岸やゆゝぬ菊の友 素半

葛の蒲ふく秋をよの園 了角

結ぶくく露の目くくるあまを 沾圃

貞享四丁卯

松のつゝをよるくくく芳のちりる

きんりきやす

時を秋すしゆれんぬし松のつと 香沾

月をよるくく松のつと風りの月 了角

山をけり菊の初のみふくくく 沾蓮

此若神のつとく 早川のあ 其角

そくくくくつとくくく松のつと 香沾

松のつとくく松のつとくく松 沾松

かくく松のつとくく松のつと 了角

あまのつとくく神山の氏 香沾

あまのつとくく松のつとく 沾松

松のつとくく松のつとくく松 沾蓮

行片くく五天のつとくく松のつと 其角

松のつとくく松のつとくく松 香沾

松のつとくく松のつとくく松 香沾

松のつとくく松のつとくく松 了角

月清く白雨はふみすれ 蝶
 空をつらふく 鯉つらつらける
 花咲く人しきあつきの尾
 歌板 珍ふ山吹のほし
 作徳海やたつらの磯のきこえて
 聲おこしつらつらつら
 桶のたもと糸又集るとし 踊る
 舟よりゆきつらつらつらつら
 物うけは思ひやまふ月うれ
 夢をみすつらつらつらつら
 下をいへつらつらつらつら
 丸輪 指さす尾とつらつらつら

沾蓬 女角 赤後箱 沾后 赤沾 沾法 扇 赤後箱 沾后 沾蓬 赤後箱 赤沾

風の音あつらふ 藤珠のつらつらつら
 大はきつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら
 つらつらつらつらつらつらつら

沾蓬 扇 赤沾 沾蓬 沾后 沾后 沾后 沾后 沾后 沾后 沾后

同

にはさるる心かろらんか時由
 落蟻のまゝうへらるる月
 貝ひらひししゆく磯なれど
 醉るハ人の肩よりとくつく
 夕の知るれいそおもいらぬ父の
 松松苗秋蟬の啼き
 池の穂こもこもぬ垣越え
 みゆと入帆のゆるる屋根茂
 奇の中を馬ののれゆる葉の
 妹うかいられを猫やきき
 記念する袋のきれはらう
 雲をとよまきく崖の物風

濁子 篇
 嵐雪 篇
 其角 子
 子 子 子 子 子 子 子

けのふねふよはしと物
 二枚とまらぬの道なき
 一十巻の巻末をよむ
 苗代もゆるるあつた
 鴉の巢のいりやむと
 秋豆下巻のまゆり
 子 子 子 子 子 子

同
 舟中や人をさるるぬ市の物
 曙をさるるふ入りの
 寺の夏信をひゆる
 火をとく舟の星をさるる

濁子 篇
 其角 子
 仙化 子

清きこく松林もしるふ霞の月
かきしにあらんすき一むし
左か持る雪の如けしをけり
春の翠の庵をけり心持馬
かきたる友引の気芽朽く
うけしとけりしとけり
松のうと松のうとけり
伊予舎のうとけり
か長川のうとけり
秋のうとけり
船のうとけり
舟をけり

松風 二齋 子化 角 化 風 角 子 化 齋 子

花のうと七八の長とけり
柳のうとけり一玉の酔
船のうとけり舟のうと
河のうとけり
松のうとけり
心ハ媚すいくとけり
四のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり
舟のうとけり

李の 風 篇 角 下 齋 子 篇 齋 子 化 下

月入る電 秋の風すこく
下りの勢を荷ふ 燈 朱
塚のふ母をさしお秋の夜
邦を軍すさしゆくそ
花のたぐさくつる 種くむ
すく 紺きゆくす 目白きる
子 角 高 化 下

十月十一日 飯子會

故人の志を承けしむ 秋の白
まの山をたもとくす
能 鶴の心算をきかたのしき
糧を分るる 山うけの 朝
扇 白々 世角 松風

かけのりき生の香けしみ
新しき基力す 舞とや
中のお画工一巻得りし
鮎 へ へ へ へ へ へ
津 垣や次中へ へ へ へ へ
歌 へ へ へ へ へ へ
酒 飲やよ乙女をさしお
舟 舟のふをさしお 筑波 根
鯛 釣 釣 つくす へ へ へ へ
青 一 向 へ へ へ へ へ
色 へ へ へ へ へ へ
月 へ へ へ へ へ へ
鶴 風 角 之 篇 執筆 嵐雪 全峰 魚兒 仙化 文鏡

葛の氣の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは
花の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは
花の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは

化峰之空吹水化之角

起出くまもつそん海の
ささづねおちをささづね
舟の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは
花の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは
花の匂いも初は山に
花もさぬるをささづね
庭の中もささづねの影を
沖こく舟をぬれしは

空角風角化吹角

路家や宗居虫の友年交りてん
茂子かろ海苔すくふ丁ろ
管海ふくくくむ此本芽のつみ
あつきしれくく喜の山 ち

如行

旅人と余尺とやきむ室の空
さつつきさきき 楓のさききき
まのゆの孫の本城を荷をえん
高子かろくく 庭の砂原
小浜川子駒のふくく不既も
権の 古枝を橋子かろくく

桐葉
篇

か
も海を子結山く村の雨をれこ
志あり 春きき 夏か 青 冬
物くくく 昼か 朝くく 夕く 物心
まのまのめきき 春く 夏く 秋
権 籠り 尺く 掃く 山の 杖
志く 志く 志く 柴人の 志
杖 化る 家も 志く 志く 志く
之く 月く 志く 志く 志く 志く
移り 入る 柳川 志く 志く 志く
多 志く 侍の 志く 志く 志く
佛 即 位く 志く 白髪く 志く 志く
相く 志く 志く の 志く 志く 竹

竹 篇 紫 行 紫 篇 竹 紫 篇 竹 紫 篇 竹 紫 篇 竹

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

芭蕉の句不使しして止ぬ

翁

賞言

知足

如風

安信

自咲

重辰

信

咲

障いくふみしる東

今安わりのほも一

ふささそそそそ

髪はりの無の油は

乃く瘡か秋ハ

物い庭のあそび

桐枝お撲めら

少油しそ花の

このうし猫の

夏の手をぬる

父の軍を起し

松うけりか

翁

足

空

翁

風

作

足

辰

作

足

翁

咲

翅とあふ小竹一花うら
 静あふ露を新をこゆるき
 三度折しとる勅のかきけ
 山寺のちり削る木を露の
 煙あふしとる露うらうら
 流津漱すおとる山はの静あし
 歌うくくしとる新あし
 辰破く月ハむの影あし
 光うらむ鏡うらうらもあし
 二
 山寺のちり削る木を露の
 陣の仮屋す基をゆるけ
 山寺のちり削る木を露の

足 足 足 足 足 足 足 足

音をばけけけけけけけけ
 花並文を集る力をとら
 山寺のちり削る木を露の

足 足 足 足 足 足 足 足

山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の
 山寺のちり削る木を露の

越人 聴處 野水 花子 危洞 昌塔

雨をうたむるも物さうなれ女
家手おはつるもあけのあうみ
干飯のふれははたきとよま
是し来るる布の苦みある屋の
涙しつゝと融けぬは
門法の前尺了る人のあつゝ
笑ふ雨もさの峰の編あ
能くは雨さうなれは
夜のあつゝと融けぬは
うあつと律儀のせの待あつ
断しつゝと融けぬは
尼寺のま雨さうなれは

泉舟 洞水 泉人 洞水 泉人 洞水 泉人 洞水

物瓶さけはあはれとさ
夕の雨の折さうなれは
布杭二本あつゝと融けぬは
皆うたむるも物さうなれ女
食さうなれはあはれとさ
旅さの心えむさうなれは
夕小髪剃りか茂川のあ
やのまはつゝと融けぬは
ほろこ平肘の枕さうなれは
月さの小髪剃りか茂川のあ
物さうなれはあはれとさ
は橋さうなれはあはれとさ

泉舟 洞水 泉人 洞水 泉人 洞水 泉人 洞水

山をこえてみよとまじいけし
等 櫻元井柳のうららけ
角のうららけ化粧いささか
中川舟のうららけとてけの
新しきうららけとてけの
花よりとてけとてけの
庶子よりとてけとてけの
式よりとてけとてけの
保野末のうららけ
標干子殿のうららけ
笠もしとてけとてけの
砂舟よりとてけとてけの

足 咲 菊 風 足 信 風 之 菊 地 足

すきまのうららけとてけの
新しきうららけとてけの
角のうららけとてけの
氏人の衣園のうららけ
驚いととてけの
細もとてけの
かきとてけの

執 筆 信 風 之 咲 菊

十一月廿四日
御社よりとてけの
鹿真よりとてけの
石よりとてけの

桐 葉

時（ハ）松かさ曇り風止ま
糸旭陽（ハ）山のうけ入ひ
静（ハ）花（ハ）月（ハ）雲（ハ）霞（ハ）の
節（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
肌（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
こ（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
の（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
破（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
古（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
抱（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
松（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
雲（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

就中（ハ）の（ハ）の（ハ）の（ハ）の
温（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
成（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
洋（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
新（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
中（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）
幼（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

おのうむねもいづるを
わりのの聲は尻尾も
秋山の外を告ぐ
そ一節をかりか
優遊寒の歩廊つ
故人 起す衣の
恋ふ千ぬれ葉の
木の桶の
石の
喜の

紫 紫 紫 紫 紫 紫

珠の
情士の葉と
歩の志は
秋を
矢中
ろ
言の
音の
木
と
志
放

如風
菊
安信
重辰
自頃
知足
業言
位
風
足
吹
菊

雲がけの籠 珠をみよの春をこめ
蝶けし 露の軒より 月
秋や昔三子もけしおとや
ひりし ぎける夕ぐれの花
ちたよつろ 義をきくゆきむの屋
瘦しきうらむおまきつれうら
米よりに字の戸むつ 新うらみ
山のこころいをはくむこころ
わらきハ岸を 陽のいとけ
うきあをせむらさきあらのき
夕のみに水の梅のそひし
此世をみよる花を 楚の夢のきり

信 辰 足 風 信 辰 翁 信 辰 足 信

いろきらふ有髪の信女衣冠
身より似ゆる若くみりけ
秋いづ 時代のけむのいよひ山
きくらう 削る伊勢は信女
貝のけりきき 月の影 遠く
新 母や ちいさな花のね出
身くとも 孫や 植ふる菊 新
母のいのちをちいさく 雲
羊鳴き ちいさく 雲
お山の花のまき 雲
よふく 雲の舞 雲
信の若みさき 雲

翁 辰 信 翁 辰 信 辰 足 信

第根より人のつりしるもの
 舟に焚火を入る本内紫
 区六丁布細干き家尺く
 柄杓につく葎の巾細く
 酌するし酒の如力の酒採煙
 款くを揚る雪の夜
 帷子半袷羽折も秋めも
 食子臨くさふゆふも
 神主も昔ハ大うの志作し
 堀尺くする葎のいれ
 とわくと葎の法子朝陽く

篇
 聽處 如行 野水 越人 若子 執筆 扇 雲 行 号

強やう 佛
 忍心入戸をゆるく 坂の
 うき名もたつる月々 傘
 長き杖をほくすみの音し
 人子抱れく舟をゆうぬ
 岸の賀干りし物衣を破り
 手まき梅を裁く幕巾
 是より人くわのわもさる出ら
 に物さくはしきみゆき

人 水 行 人 水 人 行 人
 号 行 雲 水 人 行 人

去もる市の理 通る 婦
こ海つくはる糸栗の首しと
手鬼足ししみの出れ 父
布袋破軒次舟の秋の風
和島の月
ひの月とくまはまを忘る
某戸にききそ遊るゆりぬ
泣くはまわりの海を宋の舟し
ゆりゆり安んじ 改そくきん
寺の中は原谷寺了了晴れぬ
俄くは屋をまらぬ焼けて
旅衣尾張のむね十巻ある

水行 篇 人 變 水 行 變 人 行 篇 水 行

富士画うひう又うはる
旅子屋入る花相うし
新和ううし柳あうう

水 行 人

十二月の一井寺無行

旅の舟ししたる沙をよみ内祝
舟さくやはくつまる舟を
舟わしと足をもつた行焚く
残海を尺す舟寺の舟
舟持の舟しらの上を傳ひり
舟子ゆれは諸うも火
起るをうみしる舟の舟

一井 執人 昌碧 舟行 東睦

みよれー 登天の汗ぬらひはつ
おしきり又ふけりるまのきさよ
乳とのむるおきく似し
麻布を博のぼくに織る
菅さくくく火いぬる
夕立の矢子ゆゆの音
るもゆりうぬ山隙のき
小男麻の着衣を袖の付物を
飛りゆくはよとあそびゆく
木うーに件けきまの二三
くしけりつくとおはさるるし

翁 人 竹 翁 人 翁

錢別

時雨(に)稽かゝるん字の院
大徳の葉子 徳をつく人
松風よそれく 徳を尺の
新雪ハくくき流の山は月
陸山よ心三つかよ秋の
葛の縄 面をゆつたれー
餅ニうきくくさるる
うーよおちよよ子お松いん
陸ぬーゆーと踏す

翁 人 竹 翁 人 翁
白 千 角 齋 石

同

志らうのひの 燈を めきき 木の 障
一羽 わううし 子き 一も 能
枯き の いふし 松のみ とも
田中 の 是れ 通く 其の 向く
月わ そく 柳の 家 一 敷
秋風 上る 門の 半 一 敷
春の 糸 瑞き 通く 柳の 音
雨の 八丈き 一 其の 音を 縁
松林 女 河 一 の 音を けえく
雲 情う けを かこ 一 音

松江

篇

曾良

依

泥芹

水萍

風泉

夕角

苔翠

執筆

下りの 秋 庵 高 け 所 の よう 一 音
と ち ぬ 可 也 一 音 有 人 一 音 音
庵 を 訪 へ

風瀑

は川 へ す み き 吹 雪 も 燈 を くれ
ま け さ け け け け の 河 一 音

篇

一品

琴花

虚洞

初雷 の け け け け の 音 和 え ぐ
お と ぶ 月 の 柳 柳 う み け け
牛 車 系 お け ち ち け 色 安 け

篇

お の 木 へ 母 子 不 音 音 音 音
香 き 一 音 音 音 音 音 音 音

其角

いふくわをさるる月夜
嵐雪

松江

樹をよこす千たれあはすあ
秋をこたへるるさよのき
月とんとはひよのほろおほ
曾良

とをいふおはる人をはひ三はあ
越え片せしるるれは行良古崎ん
志る浪よするはをほひひ年
阿多山松の志をよめ
焼食やいり古のきりり
知是

砂をぬく力り果るる
いりお志のゆけりき風
脚の中りりあはるる
くもりをかきり脚の月
人

空照危子旅
玉葉や更なり松もさるる
空をよこすあはるるの松
海すの子の能も告る貝吹
習戸より直り語るる
高きせんは名月を照るや
人

越人

知是

篇

人

是

夢見の責を一通り昇り

扇

写海海治出羽守氏雲宅

扇

水もたぐく回井の大橋
船つぎく岸の二股花枯

自誤
知足

宇照彦知足の海へ扇をひきかき

扇

いく首紫それほど袖を淀山す
旅のよめをたをたすのうら
と釣の月智の小船が千載富
里のおとくはたか菊折き

野水
知足

市人千いさくはるん雪の空

扇

酒の戸たぐく難の枯梅
釣の海千先山母衣を引く

花月
杜園

雲のまじりゆく行一室令

如行

秋の文了まじり竹海了
船のつら擢れまじり磯
海の山より曇る夕月
陸つら秋の路子ほく

名道
扇
野水
扇
秋年

麦藁のうや陰家やをけり
りそとさうに山原 嘆こ
登の忠 登の心 登の宿 登の
杜野人 野人

翁

いさくらハも足手 精小 登り
現のうはれ 水 起
同 登の情 登の心 登の宿
三十 登の心 登の心 登の心
阿比山 阿比山 阿比山 阿比山
かや 阿比山 阿比山 阿比山

左見 怒風 野人 支那 故江

美の心 登の心 登の心 登の心
あ 登の心 登の心 登の心 登の心

翁

から 登の心 登の心 登の心 登の心
角の心 登の心 登の心 登の心 登の心

翁

貞享五年戊辰年

翁

何の本 登の心 登の心 登の心 登の心
登の心 登の心 登の心 登の心 登の心
登の心 登の心 登の心 登の心 登の心

又云 益完

二葉のすしは行舟をもちりり
馬の字を引つて
秋を免は長き枝のゆき火
約柳を流のかよふき
門はそとにさる田の中は
山は末を信ふすれき袖の汗
たふさるをたのむ
女のみ吉おゆの破す
棋を射つては海首
ゆきそに酒をくみけ物
陣の仮面を信の籠
白きすのあはれをた

平庵 勝延 清里 光 翁 危 翁 色 野人 宛 里

けしめえたる玉れ物
もる月を結の襟織
きりきり指の
秋を免は長き枝のゆき火
約柳を流のかよふき
門はそとにさる田の中は
山は末を信ふすれき袖の汗
たふさるをたのむ
女のみ吉おゆの破す
棋を射つては海首
ゆきそに酒をくみけ物
陣の仮面を信の籠
白きすのあはれをた

危 翁 色 野人 宛 里 光 翁 危 翁 色 野人 宛 里

時あつれん限杏吹らつ
 笑うけつね毎の月をくつし
 心とすさむ家の園をきえ
 親らしく夢うた水とあけまつ
 先初瓜を来り代あす
 け村をこ時をみやううし
 ゆうこむ櫻子舟はあはう
 ちのぬわう弦子也を引挽ぬ
 たんさく跡を林垣のま
 人色玄永翁光虎人

浅きぬぬともおん雨の花
 翁

酔うちの汲みあはるぬる
 酒うやう船さう棒と柴飛く
 板屋くわわあうらふも
 夕暮れ月を傘をうてる
 百うあ瓜をけけゆく
 秋空く来一糸子履行く
 膳すれ飯のほらうき
 吹けく雨をぬけさる未申
 夕子あうをうれ都人
 とあうとくあのみまを懐子
 寺うあうく業平のあ
 寺の中を鶴の屋にけう

乙孝
 一有
 杜園
 應宇
 葛森
 翁
 翁
 翁
 翁
 翁
 翁

ちかこはけしつ新のい末
 といつはれ定て本れハ筆扱て
 神中のまのれに神をもく
 君ハ筆聖の凡終を志すひつ
 幽系集の以末初の白の岸て
 以ハ干さ砂子又字古比字の満
 々多子加くくたをを益ひて
 乞食とくく楯の本の才
 聖一とて虎あつとの有も尺つ
 目赤のけしきそまき行り他
 ハツ子あつ子れ魚信けく

若 有 翁 字 翁 翁 翁

如行

時さこく成あくひり一
 くすくく成るさめくれの
 萱草のこつれを掃もさ
 人のまのりハハの教し
 有のり去蓮の加減草一
 植木のけり今に成る故
 物みハ律りかあふ了教さ
 屋ささく純ハハの零
 藤竹の虎もはさるれ音
 ちくくく火くらやハのめさ
 福もも田舎とふれハゆさ

叩端 閑水 翁 桐葉 東藤 工山 柱根 執筆 行 福

樹子の橋かけつらう一尺
 巻終ると中折れ夢の似
 かくきは又の袖を袖もよ
 隙の用ハるる手もよ
 一里まゝしあふ青林の葉
 花也をまよきし月く山陰
 花道より東風の多きまき
 暖れやハもやかくかゝる
 清義すみくも橋のたらく
 たるみしてまよと海の汗拭
 非人も却そくちあつた
 後らぬひらつ羽おの一寸紋

水 翁 紫 庭 行 瑞 楫 山 庵 紫 翁 水

五寸と書く一寸の重
 字極好座の流る葉の白心
 やうふー以たれ行をおひ
 又してわすれぬを南阿う
 何西やう満き秋のうもやと
 古是れ石のそくく山香の中
 子あふ杖をいこくひく豆
 お十二年さくし何のゆき月さ
 不浄をよける金綱の法
 智やあままうまはしや本
 おさるんやうく儒者の小定
 山陰の花と古嫩戸の秘苑さん

行 山 翁 紫 水 瑞 楫 山 庵 紫 翁 水

よされ風の音 雨は 空 風
葉子くさく本はてのしほくろ
長座の外面を名 初くひ 足 嘆

同六月十九日

芳文

蓮池の井の屋のむきーん
まねもーんくそゆか子
さあみやあんな火もさる待
解のつらーい 舟の大きき
荷さるそつけ人の通るは
席や小窓の屋ハさーいーや
去路ふく烟ハあーんあーん

若乃 篇 越人 怪然 吹玉 若梅

櫻 ーん 岫の風のふ失ふ
古きお瓦もやろ新し
歌 (ーん) 望人のあ
流 (ーん) 舟のせはさよ
下りの 舟のせはさよ
次すのえん 舟のせはさよ
子ゆいーん 舟のせはさよ
蓮の垣根と 舟のせはさよ
蓮の垣の紐文のせはさよ
足はす末のせはさよ
つあけの舟のせはさよ
秋の風 舟のせはさよ

蓮 已百 楊柳 古法 臨步 捨奈 用名 東巡 篇 人 文 乃

七十一
 花さくはさきけき 藤かすす
 傳のめしと子持りしむ 忠
 字程子 冠あしし 長軍し
 跳りけり 籬子まはまき 西ふ
 みくくぬ 杯の 楳の 樽の 香
 弁 虫 波子 清ふあうり
 濁き 登くく 行ふき 通く 風の 法
 荷もすちらうけくす 寺の かくい
 子 梅つく 踏か けら の と けあう
 もえきささく 中さく せけ 一き
 ちの ぐら 内きく ちの 鐵とく して

然玉枝餅蟹百菊呂系歩巡文

七十二
 形あしひたる 梅はきりりさ
 新葉生 梅あしと 物 梅のい
 名 忌ふく ぬはく ちや 喜 毎
 時と 柳さく ちの ぬはけい 一
 まく 柳の ぬは ちや 喜 毎
 け 甲さく 柳さく ちの 喜 毎
 春子 密柑を 折 折さく け
 ち ぬ川人の 海さく ちの 喜 毎
 節ふハ 柳さく ちの 喜 毎
 去く くに 此 片 山を ちの 喜 毎
 牛の ちの 喜 毎
 ね けい 山を 佛さく ちの 喜 毎

然文笠巡京呂百玉菊人然笠

けし 甲寅うらわら 及 橋
去るうら 捨ふは千のちせ貝
風ひふまふあうのうら
いふうらうらうらうらうら
ゆ隙子ぬくうらうのうら
木枯うらうらうらうら
懐強うらうらうらうら

お 枝 人 翁 枝 号 餅

七月十三日 望月 御堂

初秋や海もまほのうら
のうらうらうらうら
行府きうらうらうら

重 辰 知 足

瘦くうら 藪は竹まきうら
蛤のかうらうらうら
望うらうらうらうら
白雨のうらうらうら
田面うらうらうら
お氣うらうらうら
わらうらうらうら
長巻うらうらうら
物屋のうらうらうら
折うらうらうら
龍鱗鬼うらうら
深瀬川うらうらうら

如 風 安 行 自 吹 足 風 吹 翁 行 屋 翁 風

袴きりしはくおぬを研り
 花のさかきふ尺さくお泊山
 多おしーろくや寺のま風
 ちあゆの橋ふくくハ雲くくく
 白雲 走く岸くくく市
 昔るあのおくおくく婦布衣
 くく一七々戸帳らくくあ
 がくくく百その音ゆき路
 あゆみおきん尺ハの女
 湯あゆみおれくおれをたきし
 ちりーとくー今の外 垣
 ちのころの諸あくくくく

足 行 牛 歩 足 行 足 行 足 行 足 行 足 行

急はくおぬを研り
 花のさかきふ尺さくお泊山
 多おしーろくや寺のま風
 ちあゆの橋ふくくハ雲くくく
 白雲 走く岸くくく市
 昔るあのおくおくく婦布衣
 くく一七々戸帳らくくあ
 がくくく百その音ゆき路
 あゆみおきん尺ハの女
 湯あゆみおれくおれをたきし
 ちりーとくー今の外 垣
 ちのころの諸あくくくく

足 行 足 行 足 行 足 行 足 行 足 行 足 行

お竹葉折無行
 桑稗くくくくくくくく

翁

藪の中よりとてゆつた
 秋の雨かり霧をわらう
 月あやみぬ山
 ひくくしと人のうせひくまよ
 移ららるるか
 本葉らるる枝のまも
 けりすらるる物
 送るる
 森より
 多かれ
 死るる
 石を

長虹
 一井
 越人
 胡及
 流彈
 崩
 圻
 号
 井
 人
 及

善くともとてゆつた
 火よりとてゆつた
 走らるる
 高き
 井
 木
 色
 切
 き
 人
 於

浮
 着
 井
 号
 圻
 号
 及
 浮
 井
 人
 崩
 圻

山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山

山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山
山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山

山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山

山 水 紫 菟 山 水 菟 紫 菟 山

あまの海に先ありのつらさ
葉

あまの海に先ありのつらさ
秋風

あまの海に先ありのつらさ
越人

あまの海に先ありのつらさ
翁

あまの海に先ありのつらさ
苔翠亭

あまの海に先ありのつらさ
友五

あまの海に先ありのつらさ
名菊

あまの海に先ありのつらさ
依人

あまの海に先ありのつらさ
人

かゝる庭を綴る月
風

かゝる庭を綴る月
嬰

かゝる庭を綴る月
五

かゝる庭を綴る月
依

かゝる庭を綴る月
風

かゝる庭を綴る月
人

かゝる庭を綴る月
翁

かゝる庭を綴る月
五

苔翠亭

月如ハハ燈けしつらさ

越人

おとろし 侍 棠 垣 の 板 菅 翠
此君と名をいふ 昔の春の夜
少の行 後 名のいろは 習ひ
南の あり 子 高 ちの 花
よも ぎき きの ころ ころ
おとろし 花の かけの さひ くと
女房 自ら 花の なる さき とも
就身と 物あり すとすの 友
花 柳 あり すとすの 友
まの 牛 ぬき かの 戸の 花
さし 花の いろは 花の 春
秋風 ちよと 花の いろは

管の 花は あり くとす 月
り 月あり くとす 一 洞 あり くと
仲の 花あり くとす 数 花の 花
唐人の 花あり くとす 花の 花
花の 花あり くとす 花の 花

涼川の 花
花の 花あり くとす 花の 花
酒 花あり くとす 花の 花
花の 花あり くとす 花の 花
花の 花あり くとす 花の 花
花の 花あり くとす 花の 花

花の 花あり くとす 花の 花

風より吹送る保の市人
何よりと長安はこれ名刺の終
醫のおちや丁々のる保の終
いとくしと海老の穴をむく
ひくく世はやく寺の法とく
は里より古ふま著るの終と終
足跡さるせぬ而のゆけあひ
きぬくや取まうかおそくや
風ひよふふあうは美し
まもつとく昼の湯屋とすく
物強くきむ舟海まうく
月と世は言の字根を少く

人 人 人 人 人 人 人 人

あまを轉るくらの紙脱
破れ戸の新あけの喜の末
尺母ハきひしきまの挽割
匣あくる腰袖をつと十寸鏡
物さひなる神子のものひ
人言るいさし清雪の匂ひけ
初遊了花のまは片隅
おき嵐のあゝ暑中に
垣籬のまけあはる保の終
あやうくに娘のあひま
所の雪は澄流はむそ
ゆく月よりあまの清き子

人 人 人 人 人 人 人 人

砧とせきく 黏子 居候
 秋の回を 蒔きぬらるる 長引く
 さつし ありし 又字 可く 未
 いのち しく 瓦 底の 木 急 登
 珠 走 する 子の 瘦 して ぬき ぶ
 花の 陰 淡 義 する ありし 花 ぎ
 田 ありし とも 喰 ぐ 解 ぶ 口
 翁 人 翁 人 翁 人 翁

大通虎そ急追善

其かから 又とや 枯木の 枝の 長
 子 多 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未
 兼 心 け みの 作 ぐ 未 未 未 未 未 未
 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

風の せき しく け あり する 物の 音
 内 洞 の へ け の あり しく 浅 の 内
 油 釜 を け け け け け け け け け け
 包 め とも や い し 冷 たら 物 くら ぐ
 耳 にも お 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未
 君 八 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未
 あり しく しく しく 念佛 あり け け
 い け け け け け け け け け け け
 味 を 起 する 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未
 表 の 内 風 吹 け け け け け け け け け け
 地 子 一 移 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未
 拾 ち ら ぬ 金 の 未 未 未 未 未 未 未 未 未 未

友 五 素 壹 海 通 曾 良 五 壹 嬰 通 菊 良 翁 壹

其理を、空を可斤一河の坊
晴の紙花の岩屋をつらつら
たつ小館を汲ん谷川
^二花を、陰花と集こく水し
鳥のほころをもくやむ乙の
葉をむすく、冬む雪の内
猿ハ木末おねのまを 打
若生一佛の膝を枕一と
言くおゆひて笑うぬ、言
振袖子ゆめを、おむ月影
無一くぬすむ雪の一株
雪のほお、雪の傍の戸をゆく

良通玉翠通菊良玉通翠菊

月の空代を、子午御ゆく
位前を、くす島のを、まれぬ
奈良子も、秘ぬ伝の、まふん
酒を、名く、けく、八人、手、指、
春をも、も、まぬ、庭の、砂、心
くみぬく、海を、お、射、あ、の、こ
故、子、せ、く、ら、色、く、か、あ、る、及、櫻
清き、地、子、骨、を、納、む、の、う、け
春、さ、く、ゆ、く、香、の、一、時

玉翠通玉翠通菊良玉通翠菊

きよの、お、ハ、甘、丁、の、法、う、春、ま、さ、し

法通

花鳥をよそん梅井早次
 中流をか面し酒の食干す
 朝鳴りやうき旅立ちの世
 精ひさし船の馬蹄の跡る月
 火を焚き煙をさし一吹く秋
 てししと操り虫のおり流る
 釣舟ちむしひまきし珠あつた
 生れた付尺ぬきま人のうしやま
 親をうらうらつゝおとあつし
 去のさわか事もさなきぬ酒物
 夢のぬこもさあつしや朧
 不二指あつたさつしとそ松

宗波 友五 翁 然水 曾良 水 良 通 波 五 翁

母の佛一 浅後子 砂川の
 舟棚子 白弦の桶を片並く
 濁りをさす片す砂川のぬ
 夜もすくはるぬ月まつておて
 破れ扇の骨もはなさん
 秘跡をさし怪子ゆけしきこ
 後まつしひさみくおさまの
 さんと子娘の顔も美しき
 いやしおあつし積り又塚
 ぬふり境ひも美なる跡掛て
 くとくさる白髪おろさむ
 新原子いつゝあつしお糖の輪

水 五 通 翁 菊 五 通 翁 水 五 良

嵐の山をよみと吐きけり
秋山とよみ山原の山
るる人ともよみとけり
あはれ何をも思ひしき
心とけり入るかられ
文字のついでに習ふ
あまこころにけり
侍も侍女侍り
るる人ともよみとけり
花の舞に男子も侍り
あまこころにけり

菊 菊 水 五 通 良 菊 通 五 菊

あまこころにけり
侍も侍女侍り
るる人ともよみとけり
あはれ何をも思ひしき
心とけり入るかられ
文字のついでに習ふ
あまこころにけり
侍も侍女侍り
るる人ともよみとけり
あはれ何をも思ひしき
心とけり入るかられ
文字のついでに習ふ
あまこころにけり

出云 菊 菊 水 五 通 良 菊 通 五 菊

カカラすらふかきく一徳
 故きれく好くもむ牛の夕涼
 浅くもく降る萩の稲葉
 西のゆき像をみする海の月
 信の信くむ碑の塚の香
 若生を杉木の花の植まてく
 去のあひく母衣をくくん
 詣て此處をわくく多敷の里
 神火焚、折くそかきくこ
 好のきれ冠とややん毒あし
 丸編ハ有く喜石の塔
 一かみのねくく好くや
 泉

水波洞良通涼竹五良
 水波洞良通涼竹五良

かくろくくくも好くく月
 秋空くゆく好く好く法のかく
 麻く乳を志けくあけを
 こくぬ板子縁き入る故帳の内
 松く小菊もあけ志くん
 手おくれ利くく信を好くむ
 生木を越くあくくあひの
 かくくハ袖もあくくあひの
 悴四子人あえて若くき
 昔ももあくくあひの越ゆを
 峰平ハ猿此小猿もを引
 優徳あきくあひのこくく

竹菊涼通良水竹菊涼通良

麻の羽折平はくまふ水 菊

多おめ二尺の七五を季の音
 産竹うもま棋掃の河
 鶴うの懐の小口おるきて
 村の地取うおるす秋形
 弘美湯の湧もく峰の月
 紫もまを松おま方と核とま
 赤うまぬき盤の里の國宮う
 ともうひうまぬ根の池ゆみ
 三味線をも焼くとうあつと

菊
 水
 良
 通
 波
 竹
 菊
 波
 菊
 友
 通
 波
 竹
 菊
 水
 良
 通
 波
 竹
 菊

はくくくくくく 欄のぬむくく
 系ひくらの情を思ふ流しと妻
 輪花まあうに梅うくく
 お力ぬねうううく作の面
 号とや侍の抱像鬼よむあ
 侍のあをくくくや秋の蜂
 及めららうも言はくく
 半橋のそ花おむ花の坂
 情のけくもくくくくく
 姓のゆきまのあうに舟まが
 硯をふくくくくけあつた
 夏そ花いふまのうくくく

菊
 水
 良
 通
 波
 竹
 菊
 波
 菊
 友
 通
 波
 竹
 菊
 水
 良
 通
 波
 竹
 菊

あふさかりにあふさかひさま
男あはれはすくもをささるる
涙火桶子鼻跡をたす
老ゆ能ハ針のこすの背ける
子あはれはつゆはたしきま
雫のあふさかひ二ハもをま
ゆきみすくはたきく
甲斐信濃身をゆきま湯海
雲ふらふれはたしきま

蜀通翁水通良波五

あふさかひはたきく

雅良

あふさかひはたきく

翁

あふさかひはたきく

翁
探丸

あふさかひはたきく

園情
其角
翁

さくくーさくさくやみ徳の田植
さくくーさくさく不致の五月
篇 巳百

花のけかむさみり
折てや掃ん色ゆ 帚木
七夕の八月を物のさくー
篇 篇

林鐘十七
何ぞやさくさく
さくお何くー 三夜ゆ
海志さくさく
寸木 篇

さくさくさくさく
さくさくさくさく
さくさくさくさく
秋芽 越人

さくさくさくさく
さくさくさくさく
篇 悦然

かき新巻
さくさくさくさく
さくさくさくさく
安住 知是

風を懐く月あり月あり
秋の空ありては清く澄く
和泉の川ありては清く澄く
足

ひらひらと花散る
昔菊の山ありては清く澄く
篇

木うらやまの山ありては清く澄く
よき山ありては清く澄く
野のありては清く澄く
篇

春の山ありては清く澄く
冬の水ありては清く澄く
みよとありては清く澄く
舟泉
越人
羽衣



